解説

磯部　加代子

クルド人は、メソポタミア文明を育んだチグリス・ユーフラテス川を中心とするクルディスタン（クルド人の土地）に長らく住んで来た中東世界における先住民族である。しかし現在その地はトルコ、イラク、シリア、イランという別々の国に分断・支配されている。トルコ人社会学者のイスマイル・ベシクチの言を借りるなら、クルディスタンは「多国間植民地」であり、今日までクルド人はそれぞれの宗主国から迫害を受け続けてきた。中東に居住する多数派三大民族であるアラブ人、ペルシア人、トルコ人に次ぐ人口（二千五百万人から三千万人）でありながら、いまだ独立国家を持たない、中東における決して少数とはいえない「少数民族」、それがクルド人である。

今回クルディスタンの作家ということで紹介させていただくヤウズ・エキンジとブルハン・ソンメズは、トルコ出身のクルド人作家である。エキンジの『祖父の勲章』とソンメズの『先史時代の犬ども』は、いずれも『あるデルスィムの物語』（Bir Dersim Hikâyesi, 二〇一二年）という短編集に収められている。これは、一九三八年に起きたトルコのデルスィムにおける虐殺事件を題材とした、二三人の若手作家による全編書下ろし短編集である。

トルコであれば、「デルスィム」という地名は人々に何事かの記憶を想起させる。それが、どのような立場のものか、いつのものか、誰のものか、直接的なのか間接的なのか。様々な温度差を生み出しながらも、「デルスィム」は人々の気持ちをざわめかせる地名である。

しかし日本の地で、「デルスィム」という地名を聞いて何事かを思う人はトルコの地域研究をしている人以外にはまずいない。そこで、デルスィムの虐殺に至るまでの北クルディスタン、つまり、トルコの国境線内のクルディスタンの歴史を少しだけ振り返ってみたい。

クルディスタンを植民地支配する各国の中で、とりわけ激しい同化政策をクルド人に対して行ってきたのは、トルコである。同化政策にともなってクルド語の地名であるデルスィムの名は、トゥンジェリというトルコ語に変更され、地図上からはデルスィムの名前は消えてしまった。しかし、いまだに根強い市民権を得て、デルスィムの名は人々の記憶から消えることはない。しかしそれは、一九三七年から三八年に起きた、大虐殺の記憶とともに想起される名でもある。

デルスィムの地はアナトリア東部の険しい山々に囲まれており、実質的な自治が行われていた。また、クルド語の中でもザザ語を話し、宗教的にもトルコの多数派であるイスラームのスンニー派ではなくアレヴィー教徒の多い地域だったことが、デルスィムの自治を可能にしていたのかもしれない。

デルスィムの虐殺からさかのぼること約十四年前の一九二三年、ローザンヌ条約で列強各国による分割を免れ、独立を勝ち取ったムスタファ・ケマル率いるアンカラ政府は、これに先立って交わされていた一九二〇年のセーブル条約で約束されていたクルディスタンの自治を反故にした。アンカラ政府はクルド人を「山岳トルコ人」と呼び、クルド人の強制移住ならびにクルディスタンへのトルコ人の入植を進めることになる。少数民族は保護されるが、クルド人は「山岳トルコ人」、つまり、トルコ人なのだから、少数民族ではない、というレトリックである。

独立国家の夢が破れたクルド人は、アンカラ政府の一方的な振る舞いに抵抗し、次々と各地で反乱がおこる。

一九二五年にはアレッポでシャイヒ・サイトが反乱の狼煙を上げ、一九二九年にはレバノン

の地で組織された新しいクルド人組織「ホイブーン（独立）」らによるアララト山の蜂起が起きる。いずれも、ムスタファ・ケマルによって弾圧されてしまうのだが、最後の大きな抵抗は、デルスィムの地で起きた「デルスィムの抵抗」（一九三七～三八年）である。それはまた、政府軍による無差別な住民虐殺を伴うものだった。『祖父の勲章』の文中にもある通り、虐殺のすさまじさもさることながら、女児は家族から引き離され、トルコ人としての同化教育を受けさせられ、トルコ人将校の家庭でお手伝いなどとして引き取られた。文化は女から女へ引き継がれるもの、という考えから、女児の同化政策が積極的にとられたものと考えられる。

国内で常に「二級市民」の扱いを受け続け、クルド語という母語を禁じられ、文化を否定され続けてきたトルコ国内のクルド人たちは、やがて武装闘争の道を選ぶ。一九八四年、クルディスタンの独立を掲げるクルド労働者党（PKK）による武力闘争が開始された。今日にいたるまで、トルコ国軍側を含め、多くの若者の血が流されたが、独立国家の樹立はいまだ叶わない中、今もクルド人は世界中から見放された存在として生きている。

トルコ一の大都会イスタンブルの、若者が集うとあるカフェ。平凡な日常のシーンで幕を開ける『祖父の勲章』という作品が、主人公の回想を介して読者を導く場所は、かつて虐殺事件の起きた東部アナトリアのデルスィムの地である。

主人公はそれまでも、祖父がデルスィムの地で何をしてきたのか、全く知らなかったわけではない。むしろ、それを誇りに思っていたぐらいだ。「建国の父」である初代大統領ムスタファ・ケマルから授与された祖父の勲章は、幼い主人公にとっては、「偉大なる祖父」の証明であり、自尊心をくすぐる優れた道具だった。その後の人生で「偉大なるアタトゥルク」も「偉大なる祖父」も、彼の中では矛盾することなく確たる居場所があった。

ところが、正義感あふれる婚約者の視点と主人公のそれが重なったとき、祖父が「偉大なるアタトゥルク」から授与された勲章の意味が、主人公の中で劇的に変化する。

しかし、主人公の変化は突然起こったわけではないのではないか。トルコに居ながら「デルスィム」と完全に無関係ではいられないはずである。静かに主人公の中で醸成されていた何か、言語化され、実体化されるのを恐れていた何かが、婚約者レンギンの言葉に触発されて、一気に噴出したのではないか。

「祖国のために闘った英雄」という物語は強固で、徴兵制を採用している上に内線状態にあるトルコでは、多くの若者が兵士としての義務を、決死の覚悟で果たさなければならない。また、兵士たちの愛国心を保つには「偉大なるアタトゥルク」という崇拝の対象も不可欠である。

「虐殺」という歴史について、事実無根だとはねのけ、これまで信じられていた通りの物語を真に受けて生きていくことは、いくらでも可能である。主人公の父がそうであるように。

しかし、主人公はこれから一生を共にしようとする、愛する女性の目で世界を眼差すことを選ぶ。自身が「偉大なる英雄」などではないことを自覚していたであろう祖父のことを思い、政治や歴史のことをほとんど考えることもなかった主人公が、デルスィムでの出来事について、ようやく自分の頭での思考を選ぶのである。

著者のヤウズ・エキンジ（Yavuz Ekinci）は、クルド語を母語としながらトルコ語で著作活動を行うトルコのクルド人男性作家である。

一九七九年にトルコ東部の県、すなわちクルディスタンのバトマンに生まれた。二〇〇四年に作家デビューし、これまで中・長編合わせて七作品を発表。国内の文学賞を五つ受賞している作家だが、最近までバトマンの小学校で教鞭をとる「学校の先生」でもあった。

さらに、「イエロー・ブックス・シリーズ」（Sarı Kitaplar Dizisi）と銘打ったクルド人作家による作品の翻訳プロジェクトを開始し、編集者の顔も持つようになった。第一弾として

二〇一五年、アラビア語やドイツ語で書かれたクルド人作家による小説が、トルコ語およびクルド語に翻訳されトルコ国内で出版された。

エキンジの作品は、たとえそれが短編小説集であっても一つの作品が別の作品と巧妙に絡みあうようにできているばかりではなく、独立した別々の小説間ですら、同じ人物、連続するエピソードが絶妙な具合に織り交ぜられており、それもまた彼の作品を読む際の魅力の一つとなっている。

短編集『イスマイルと呼んでくれ』（Bana İsmail Deyin, 二〇〇八年）は、関連性のないばらばらの作品たちから成っている短編集だが、そこに描かれた各小説の主人公たちが、最終章で自分たちを生み出した「国民的作家」の失踪後に一堂に会すというくだりには度肝を抜かれた。最終章のヒロインとして描かれるはずだった自殺寸前のヒロインが、自身の運命が宙ぶらりんのままの状態であることを嘆きながら、作家に変わって作家の失踪を物語る。

すると今度は、『肌に書かれた章句たち』（Tene Yazılan Ayetler, 二〇一〇年）で、前作の「国民的作家」の失踪それ自体がメインテーマとして描かれる。また、その物語とパラレルに、不死の運命を背負うこととなったギルガメシュ叙事詩に登場するウタナピシュティムの数奇な長い、長い人生が、「国民的作家」と交差する様が描かれることとなる。

次の長編小説『天国の失われた大地』（Cennetin Kayıp Toprakları, 二〇一二年）では、三代に渡るクルド人一家の故郷喪失の歴史が、クルディスタンの歴史にとって決して無視できないアルメニア人大虐殺の歴史を織り交ぜながら描かれている。

幼少期に祖父がクルド語で語ってくれた物語こそが、作家としての原点であると語るエキンジの小説は、小学校に入って初めて出会う「国語」であるトルコ語で書かれている。しかし、クルディスタンとクルド人を描く、という強い意思に貫かれた作品郡たちをトルコ文学と呼ぶには、どうしてもためらいがある。

本人の語るところによれば、「自分はトルコ文学を書いているのであって、住んでいる地域や民族的出自が重要だとは思わない」のだそうだが、筆者が彼の著作を数冊読んだ限りでは、明らかにそれらはエキンジにとって抜き差しならないほどに重要と思われる。しかし、彼にそのように語らしめるのは、バトマン出身であるということで「第二リーグ所属」のように扱われることを嫌う彼の、トルコ文壇における作家の評価基準に対する批判的態度のなせる業なのだろう。「クルド文学はノーベル文学賞を取れるか？」国内の文学雑誌のこのような問いに対し、問いそれ自体が孕むクルド文学に対する蔑みの眼差しを指摘する。

クルド人軍事組織ペシュメルガの参戦により、唯一イスラーム国との戦いに勝利した町、シリア・クルディスタンのコバニのために二〇一五年に出版されたアンソロジー『石に囁く物語集コバニ』（Taşa Fısıldayan Öyküler KOBANÊ, 二〇一五年）には、エキンジの最新作『夢を引き裂かれし者たち』（Rüyası Bölünenler, 二〇一四年）の最終章が掲載されている。作品は、ドイツに難民として逃れた主人公のクルド人男性が、自分とは対照的に山に入ってゲリラとなった弟を、死の縁にいる父親のために探しにいくというお話である。

主人公がクルディスタン各地で次々とユニークな人々に出会ってゆく物語は、章ごとに独立した一つの話として読むこともできるが、一度ひっこめた話がもう一度出てくる箇所がいくつもあり、やはり、抄訳で紹介するのは気が進まず、最後まで迷ったが、長編小説の翻訳という未来についてはアッラーに託すことにした。